

News Letter vol.20

Japanese Society for Dance Research

目次

1. 第74回大会のご案内… 実行委員長・事務局 : 朴京眞

2. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

2-1. インタビュー

特集:「組踊」重要無形文化財指定50周年

国立劇場おきなわ 調査養成課 課長 茂木仁史さんに聞く 組踊の伝承者養成と研究公演

茂木仁史(国立劇場おきなわ)

聞き手: 波照間永子(明治大学)

2-2. 国際学会・機関の情報(舞踊学・演劇学・音楽学・パフォーマンス研究)

①国立民族学博物館 特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」 岩澤孝子(北海道教育大学)

②日本ポピュラー音楽学会

垣沼絢子(フリー)

3. 私にとっての在外研究

「研究者と一人の人間としての狭間での奮闘」 ボローニャ大学(イタリア)・UCLA(アメリカ)

金光真理子(横浜国立大学教育学部)

4. 国際学会・シンポジウム発表報告

North American Society for Sport History (NASSH) 2022

高野美和子(日本女子体育大学)

5. 委員会より

5-1. 学会誌編集委員会… 八木ありさ

5-2. 2022年度学会大会… 朴京眞

5-3. 例会企画運営委員会… 森立子

5-4. 研究奨励賞選考委員会… 貫成人

5-5. HP管理委員会… 寺山由美

5-6. 学術連合委員会… 貫成人・寺山由美

5-7. ニュースレター委員会… 波照間永子

6. 事務局だより

7. 情報コーナー

編集後記 奥付

1. 第74回大会のご案内

第74回舞踊学会大会のご案内

第74回舞踊学会大会実行委員長 朴京眞

第74回舞踊学会大会は、2022年11月19日(土)・20日(日)の2日間にわたって聖心女子大学(東京)を会場校として開催されます。現在もなおコロナ禍で厳しい状況が続いておりますが、会場校である聖心女子大学のコロナ対応の方針、並びに諸般の状況を鑑み、コロナ感染防止対策を徹底しつつ「対面で実施する方向」で準備を進めております。

本大会では、幼児から高齢者に至る人間の生涯を視野に入れたダンス教育を取り上げ、これまでダンス教育が抱えてきた「学校の内と外」「体育と芸術」という2つの境界と、それを越えた往来と拡張に向けて、「多様な身体表現・コミュニケーション・SDGs教育(ESD)」から、大会テーマを「ダンス教育をめぐる境界を超え、未来へつなぐ」と設定しました。

舞踊に関する多様な一般研究発表に加え、大会特別企画として、一日目の基調講演&鼎談では、聖心女子大学の永田佳之先生をお招きして「SDGsを実現する教育としてのESDの真髄:2050年の教育への再想像」というタイトルでご講演いただきます。基調講演を受けて鼎談では、現在あらゆる場面で注目されている「SDGs教育(ESD)」(持続可能な開発のための教育)からダンス教育の可能性につなぐことを試みます。

二日目のシンポジウムでは、多様性とダンス、障がい児の身体表現遊び、学校におけるダンスとESD、芸術と教育、などの様々な立場と切り口から大会テーマに迫り、ダンス教育の現実と未来の姿を描いていきたいと存じます。

なお、大会の詳細なプログラムや一般研究発表の抄録、基調講演・シンポジウムの概要は事前に舞踊学会HPに掲載いたします。ご自身でダウンロードし、プリントアウトしていただけますようお願いいたします。

大会の事前登録締め切りは、11月10日(木)です。事前登録は、右下のQRコードより申込ください。学会大会の3年ぶりの対面での開催が実現することを祈って準備を進めてまいります。今後感染拡大等により変更がありましたらその都度お知らせいたします。

学会大会へ奪ってご参加いただきますよう、皆様のご登録をお待ちしております。

記

1. 日時:2022年(令和4年)11月19日(土)・20日(日)
2. 会場:聖心女子大学 宮代ホール・3号館
3. 内容:一般研究発表(23演題)

基調講演&鼎談

「SDGsを実現する教育としてのESDの真髄:2050年の教育への再想像」

永田 佳之(聖心女子大学 現代教養学部 教育学科教授)

「基調講演を受けてダンス教育につなぐ」

永田 佳之+貫 成人(専修大学)+村田 芳子(司会、平成国際大学)

シンポジウム

「ダンス教育をめぐる境界を超え、未来へつなぐ」

—多様な身体表現・コミュニケーション・SDGs教育(ESD)—

司会・進行:猪崎 弥生(放送大学、舞踊学会会長)

シンポジスト:八木 ありさ(日本女子体育大学)

大橋 さつき(和光大学)

山崎 朱音(横浜国立大学)

堤 康彦(NPO法人 芸術家と子どもたち)

以上



2. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

2-1. インタビュー

特集:「組踊」重要無形文化財指定50周年

国立劇場おきなわ 調査養成課 課長 茂木仁史さんに聞く

組踊の伝承者養成と研究公演



聞き手: 波照間永子(明治大学)

1. はじめに:「組踊」重要無形文化財指定(総合認定)50周年によせて

波照間:舞踊学会のニューズレターは、過去3年間、海外の舞踊学関連機関の情報をとりあげてまいりました。今号からは足元の国内にも目を向けて情報を発信する方針に改訂しました。そこでリニューアル初回の特集として、国立劇場おきなわ 調査養成課 課長の茂木仁史さんに、組踊の伝承者養成についてお伺いいたします。

1972年(昭和47)に沖縄が日本本土に復帰して今年で50年。ちょうど復帰の年に組踊が国の重要無形文化財に指定されましたので、2022年は「組踊の重文指定50周年」の節目の年ともいえます。国立劇場おきなわでは、組踊の未来を担う人材をどのように育てているのでしょうか。まずは国立劇場おきなわの組踊研修の教育方針について教えてください。

2. 組踊研修の教育方針

茂木:組踊研修は、プロの組踊の立方と地方(伴奏音楽の演奏者)を育てることを目的としています。従って、研修は実技が中心です。さらに、必要な知識としての講義「座学」、専門の課程以外の「副科」として、例えば、歌三線を専攻する者が、他の楽器を選択して修得します。また、基礎体力をつける身体訓練や発声訓練など、全てプロの実演家に必要なトレーニングをします。ですから、研究者を目指す方や、趣味として習いたい方など、目的が異なる方は、そもそも入れないんです。

3. 研修生の募集と審査

ー:そうすると、やはり基本的に楽器なり、舞踊なり、基礎的な実技の力を身に付けている人が受験するんですね。

2. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

茂木：そうです。書類審査（経歴）と実技試験があります。例えば立方だと、台詞を唱えるテストと、古典舞踊の実技テストがあります。歌三線は課題曲と自由曲の演奏を行います。面接では、琉球の古典芸能に対する興味や、生涯の仕事として打ち込む覚悟と意気込みについてなどが問われます。審査員は、実際に指導にあたられる実技の先生方と、私も劇場側の立場で参加しています。先生方は人間国宝や第一線で活躍する方々ばかりで、そういう方々の前でも堂々と演技・演奏できるかなども見ているのです。

4. 研修プログラムの内容

一：茂木さんは、研修生を選抜する時点から修了するまでのプロセスに立ち会われているということですね。研修プログラムの具体的な内容について教えてください。立方が楽器も習い、地方が舞踊も習うということですが、両方の立場を経験することで何か大きな効果がうまれるということでしょうか。

茂木：具体的に言うと、月曜日から木曜日までが研修日ですが、月曜と木曜日の二日間が専科の研修日になります。従って、月・木は、地方（歌三線等音楽）と立方（役者）は別々に授業を受けています。火・水は座学・基礎訓練や副実技などに当てられ、皆一緒になって座学や体操・発声訓練などを受講します。副実技は選択制で、地方の場合は、専攻以外の楽器の習得や舞踊も選択できます。立方は、1・2年目の副実技は舞踊が必修科目で、3年目に楽器などを選択します。2年目までの立方が習う舞踊はレベルが高いので、楽器の人たちが舞踊を選択できるのは3年目だけと決まっています。このようにして、自分の専攻以外の役割を経験することで、集団芸術である「組踊」の中における自分の役割を、客観的に認識できることを期待しています。

研修カリキュラム

組踊研修では、次のような研修科目が開設されています。

- ① 基礎演技：立方、地方（第二線、等）
- ② 基礎音楽：立方（歌三線、等）
- ③ 基礎舞踊：立方（舞踊、等）
- ④ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ⑤ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ⑥ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ⑦ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ⑧ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ⑨ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ⑩ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ⑪ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ⑫ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ⑬ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ⑭ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ⑮ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ⑯ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ⑰ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ⑱ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ⑲ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ⑳ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ㉑ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ㉒ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ㉓ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ㉔ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ㉕ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ㉖ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ㉗ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ㉘ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ㉙ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ㉚ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ㉛ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ㉜ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ㉝ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ㉞ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ㉟ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ㊱ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ㊲ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ㊳ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ㊴ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ㊵ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ㊶ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ㊷ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ㊸ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ㊹ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ㊺ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ㊻ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ㊼ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ㊽ 基礎音楽：地方（歌三線、等）
- ㊾ 基礎舞踊：地方（舞踊、等）
- ㊿ 基礎音楽：地方（歌三線、等）

3年間の研修基本パターン

（研修の進行状況等により、実際の研修とは異なる場合があります）

学年	科目	内容	備考
1年次	基礎演技	立方、地方（第二線、等）	
2年次	基礎演技	立方、地方（第二線、等）	
3年次	基礎演技	立方、地方（第二線、等）	

一週間の研修基本パターン

（研修の進行状況等により、実際の研修とは異なる場合があります）

曜日	科目	内容	備考
月曜日	基礎演技	立方、地方（第二線、等）	
火曜日	基礎演技	立方、地方（第二線、等）	
水曜日	基礎演技	立方、地方（第二線、等）	
木曜日	基礎演技	立方、地方（第二線、等）	

国立劇場おきなわ

TEL 098-871-3318

QRコード

組踊 研修生募集

第七期

求む、未来を創る伝承者

国立劇場おきなわ

国立劇場おきなわ「組踊 研修生募集」2022年9月20日 参照

<https://www.nt-okinawa.or.jp/kumidori-trainee/recruitment>

2. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

5. 修了者の進路

ー：3年間の研修を受けた後の進路はどうなっていますか。

研修中の生活・修了後の生活

茂木：まず、組踊の実演家を養成する組織は限られています。私共以外では、沖縄県立芸大の琉球芸能専攻や、稀に舞踊研究所などが行う程度です。また、芸能団体としては、[「伝統組踊保存会」](#)（重文指定保持者および伝承者などが所属する会）のほか、国立劇場おきなわ組踊研修修了者で構成される、[「^{しー}子の会」](#)も、認知度を深めています。

しかし、常時興行を行う劇団はないので、研修修了生は組踊実演家としては「フリー」になります。組踊の仕事だけでなく、琉球舞踊や沖縄芝居の仕事もするし、「教える」という選択肢もあります。大学や高校、舞踊研究所、カルチャー教室とか。生活のための収入を得る仕事を別に持っている人も多く、組踊以外の仕事をしないという人はいないですね。

ー：副業を持ちながら実演活動をやっていくということですね。

茂木：そうです。商業演劇などは、1カ月単位の興行で何万人も集客しますが、そんな需要もないのです。沖縄の芸能人の中には、平日の昼間は他の仕事をし、夜は芸能のお稽古して、週末に本番の舞台に立つという人が少なくありません。組踊も、そうやって支えられています。

だけど、それが逆に健全な面もあり、生活と芸能活動にほど良い距離があるので、それぞれの性格に合ったライフプランが成立しています。今、お金がないから仕事を一生懸命やろうと仕事に励む時と、余裕ができて芸能に打ちこむ時と、フリーだからこそその自由です。周りもそんな具合だから、ライフワークとして芸能と付き合っていけるのだと思います。

人間国宝の先生方でも、若い頃から舞台一筋という人は少なく、仕事してる時期もある。紆余曲折があって、現在に至るわけです。自分の生き方に合わせていけるから、発展性もあるのだと感じています。

ー：そうですね。いくつか自分の居場所というか、所属する場所があったほうが、何かこう、一つだけっていうと、折れたときに行き場を失ってしまうので。

茂木：今の沖縄の芸能界には合っているようです。だから、国立劇場おきなわの研修は、夜に行っています。夜6時半から9時45分まで、1コマ90分を2コマです。昼間は高校や大学、あるいは働いてる者もいて、夜は研修を受けて、週末は自由に過ごします。

2. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

そうすると修了してからも生活サイクルが変わりません。昼働いて夜稽古、週末に舞台を務める。だから、辞める者も少ないのです。辞めると宣言する必要がないので、今回は休みますが次はやりますと、ペースを自分で決められる。

ー：なるほど。そうすると昼間は自分の生活の基盤となるような活動、大学に行くなり、高校に行くなり、仕事をするなりして、夜に研修を受けたり実演活動をするといった両輪でやっているの、それがずっと継続してるという、ある意味一貫した生活ですね。

副業で生活の基盤を作りつつ、オファーがあれば舞台に立つとのことですが、修了生の実演家として活躍状況はいかがでしょう。

研修で培った力を多様な舞台で展開

茂木：研修生は、『朝薫五番』の5演目と『花売の縁』を足した6演目を3年間で学びます。1年間に2演目で、半年に1回ずつ発表会をします。発表会では一人一役になりますが、研修では全ての役を順繰りに習得します。

そうすると3年間で6演目の全ての役を一通り経験するわけですね。大体、組踊の役のパターンは決まっていますから、若い娘からおじいさんまで演じてみると、応用が利く。それで、沖縄芝居などでも対応できるわけです。立ち居振る舞いが綺麗すぎるといわれることもありますけど。露出する回数が増えれば人気も出るし、舞踊などでも使われるようになる。結果がついてくると、続けられる。それには「子の会」の存在もあるでしょうね。

「子の会」の優れた活動と運営方法：学校公演

ー：「子の会」は修了者が自主的に立ち上げたんですね。その活躍が認められて、つい最近も、第1回[「古典の日文化基金賞」](#)受賞されていますね。

茂木：「子の会」は任意団体で、修了しても入ることは必須ではありません。「子の会」は学校への出張上演の仕事をたくさんやっています。県内外でワークショップも併せて、年間で30公演ほど。皆仕事もあるので、入れ代わり立ち替わりでこなしています。

「子の会」は一期生が立ち上げたんです。「子の会」の「子」には二つの意味がこめられています。琉球国では、一番下っ端の役人は『子(しー)』という立場だったこと。もう一つは、ちょうど子(ね)の年にできたんですね。十二支の。それで、結成したときに、暦が一巡り、12年たったら卒業するという規約を作った。だから今、一期生はもう抜けているんです。二期生も今年度で抜けて、次の3月に研修を修了する6期生と入れ替わります。

2. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

ー：12年でメンバーが抜けていくっていうことは。12年たった自分たちが後輩を率いる立場になるんだっていう責任感がうまれますよね。

茂木：年を重ねていけば、主役級を独占してしまいますからね。次の世代に席を譲って、上の世代は国立劇場おきなわの自主公演で主役を目指す。いい具合に循環するように組み立てられています。そこはすごく感謝してるっていうか、偉いなと思っています。

ー：そういう仕組みを自分たちで構築したというのは素晴らしいですね。

ところで茂木さんは国立劇場おきなわに着任される前は、東京三宅坂の国立劇場で31年間、企画制作のお仕事をなさっていたそうですが、東京の国立劇場とは違った国立劇場おきなわの特徴はありますか。

6. 国立劇場おきなわ の際立った特徴：稽古室の夜間提供

茂木：例えば、稽古室は外部団体にも貸すのだけど、沖縄は夜11時半まで貸し出しています。毎日深夜まで駐車場が車でいっぱいになりますが、国の施設で夜11時半まで使えるところはないと思います。これも、沖縄の芸能事情を反映していて、昼は仕事、夜は稽古、週末に本番というサイクルに合わせているんです。そういうところに沖縄の良さを感じます。

ー：そうですね。私も、3年前から舞台活動を降りて、大学での教育研究に専念していますが、若いときに、国立劇場おきなわの稽古室を何度も夜使わせていただき、便利になったと思っていました。国立の施設で稽古に専念する空間が夜開かれているというのは有難いことです。職員の方に感謝しております。

最後にもう一つ、重文指定の50周年という節目で、国立劇場主催の組踊公演『朝薫五番』が開催されますね。それについてご案内をお願い申し上げます。

7. 沖縄県本土復帰50周年 「組踊」国指定重要無形文化財50周年記念公演 研究公演 『朝薫五番とからくり花火』（2022年10月14日～16日）

茂木：沖縄が本土に復帰する前、琉球政府は玉城朝薫作の組踊五番、いわゆる『朝薫五番』を重要無形文化財に指定していました。1972年5月15日、復帰により琉球政府が消滅し、国が受け継いで「組踊」として重文に指定しました。それから50年です。これを記念して、琉球国時代に首里城のお庭に設置された「御城舞台」を劇場隣の組踊公園に再現し、「御城舞台」で演じられていた『朝薫五番』とからくり花火、入子躍を上演することにしました。実は、朝薫が組踊を発表した時の舞台は、中世の能舞台に似た特殊な構造の舞台でした。この舞台を使うと、朝薫作品の

2. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

コンセプトと魅力がはっきり分かります。特別な記念の年だからこそ、これをやることになりました。

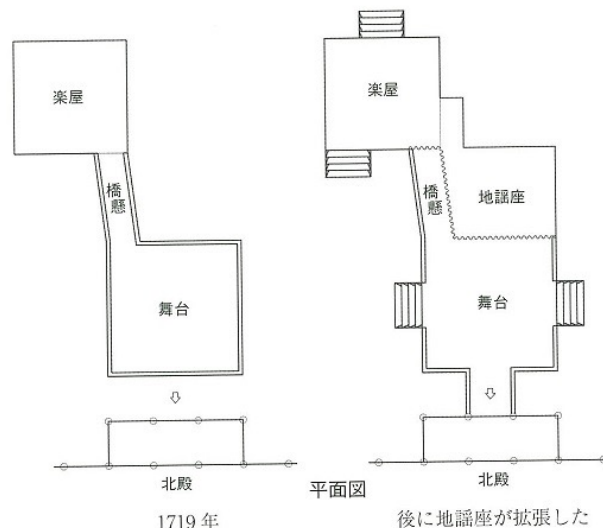


『朝薫五番とからくり花火』のチラシ 2022年9月20日参照

https://www.nt-okinawa.or.jp/performance-info/detail?performance_id=2315

一：舞台構造は、茂木さんの博士論文のテーマですね。深いご研究を踏まえての今回の研究公演、楽しみです。以前、この公演のご案内をいただいたとき「朝薫のときの舞台の形で、野外でやるのが一番いい。それ以降だと、野外にこだわる必要もない」と仰っていましたが、もう少し詳しく教えてください。

茂木：首里城・御庭の御城舞台は、1719年に姿を現してから最後の御冠船である1866年まで、「本舞台と後方の楽屋を橋掛りでつなぐ」という基本構造は変わらないのですが、変化もありました。「本舞台に屋根が架かり、本舞台の背後に幕が吊られ、その裏に付け舞台が増設されて、舞台上の地謡が幕裏に引き込み、幕の両端が登退場口となって、幕の前に松の立木が立てられた」のです。それぞれの変化が何時どの順に起きたかも不明ですが、1808年にはこれらの変化が遂げられています。

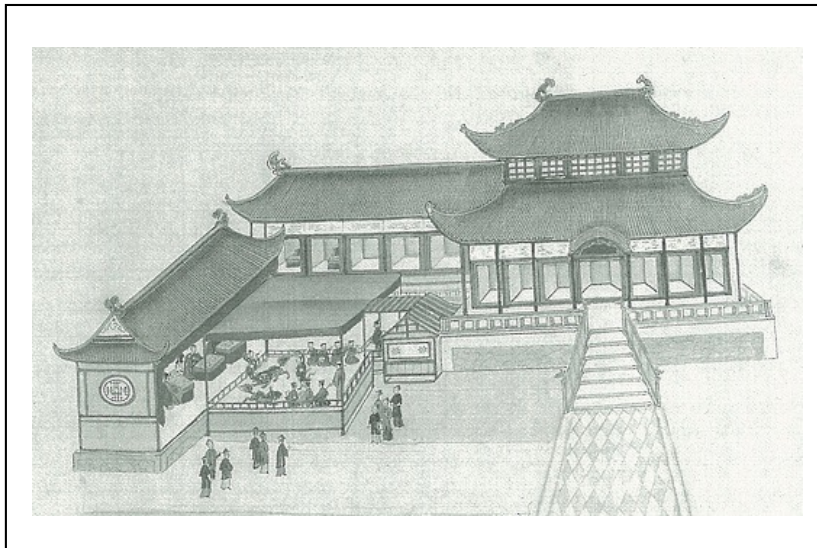


麻生・茂木編 (2020 a, p.66)

2. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

まず、重要なのは「本舞台と後方の楽屋を橋掛りでつなぐ」という基本構造で、これは能舞台構造といえます。琉球国時代にこの形が尊重されていたのは、武家の式楽として能舞台の格式を借りたためと思われます。廃藩置県後に市井の芝居小屋に場所を移すと、橋掛りは姿を消してしまい、現在のプロセニウムアーチ形式に取って代わられてしまいます。

1719年の舞台は、幕一枚もなく四方を素通しにし、飾るものも隠すものもない全き世界で上演されました。当時は能の囃子方もいて、橋掛りの彼方から登場人物を招き出し、「栄やし」立っていたのです。朝薫の五番とは何か。宵闇に道を失い辿り着いた一ツ家で後に鬼と化す女と出会い、子を盗られた母が狂い乍らも子を尋ね当て、大蛇の生贄になろうとする娘は天の力に救われ、天女は地上に降りて子供を為す。さらに、幼い兄弟が親の仇を倒した小刀は、父親が肌身に付けた守り刀だったなど、朝薫五番には、常に見えざる神秘の力が働いています。こうした特徴は朝薫以降に影を薄めますが、同時に幕の出現とともに舞台構造も変化し、能から離れていく様子が見られるのです。今回、野外舞台で朝薫作品を上演するのは、神秘性を再発見するためでもあるのです。



中秋宴図『冊封全図』（北京・故宮博物院所蔵）『冊封琉球全図』より転載

一：図を示してのわかりやすい解説、ありがとうございました。この公演のチラシに「考証・演出 国立劇場おきなわ文芸研究会」とあります。どういうメンバーから構成されていますか。

茂木：今までの公演では、監修者を立てることが一般的でした。今回は、朝薫の時代をどうイメージするか、話し合える場が欲しくて研究会にしました。300年前の舞台に関する資料は乏しく、わずかな手掛かりの上に推論を構築するような作業ですが、通常の研究と異なるのは舞台上演を目標とすることで、イメージと実際をすり合わせる作業が重要です。衣装については実際の製作に携わる職人も交えて、特に活発に議論しました。結果としての舞台は妥協の産物ですが、やってみる価値があると思われることは具体化するよう努力しました。演出については僕と芸術監督

2. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

の金城真次で担当しました。それほど大きく変えてはいませんが、何より登退場が橋掛かりだけというだけでも、いつもと動きが変わります。

研究会の成果をすべて上演に盛り込むことは不可能なので、公演以外の方法でも発表し、分らなかったこと、出来なかったことも明らかにすることが、今後のためになると考えています。

一：そうなんですか。ぜひ聞きたいですね。ここまでは分かったんだけど、さまざまな制限、限界があって実現できなかった点。「調査研究による再現の可能性と限界」を明らかにすることこそ「研究公演」の意義だと。国立劇場主催の講座や学会のシンポジウムなどで、ぜひ機会をつくって成果を発信して欲しいです。

茂木：実は、衣裳については既に講座を開催しました。このあとは、新聞やテレビなどマスコミを通じたり、『ステージガイド』（国立劇場おきなわの公演プログラム）にまとめること、展示で見せられるものは10～12月に展示室で紹介し、研究書としては書籍を出版する予定です。

一：それは素晴らしいですね。舞踊学会のニューズレターでも紹介させてください。『朝薫五番』と一緒に上演される「からくり花火」についてもお話いただきたいのですがお時間がきてしまいました。「からくり花火」上演の基となったご著書は会員に紹介しますね。

本日は、公演前のご多忙のなか、お時間を頂戴しありがとうございました。国立劇場おきなわ調査養成課が取り組んでいる「組踊の伝承者研修」と「調査研究」、それを踏まえた「研究公演」「研究成果公開」、すべてがリンクして展開している点、とても参考になりました。ありがとうございました。10月の研究公演を楽しみにしております。

(2022年9月5日 Web会議でインタビュー実施)

文献

麻生伸一・茂木仁史編、国立劇場おきなわ監修(2020 a)『冊封琉球全図：一七一九年の御取り持ち』雄山閣

麻生伸一・茂木仁史編、国立劇場おきなわ監修(2020 b)『「火花方日記」の研究：琉球国王尚家文書』榕樹書林

関連書籍（上記文献）の紹介

『「火花方日記」の研究：琉球国王尚家文書』

中国から琉球王の代替わりに訪れる冊封使の宴(1866)で、琉球舞踊や組踊とともに首里城の御庭で行われた花火の記録。国立劇場おきなわが、幻の花火の演出・再現公演に繋げた貴重な書。

榕樹書林ホームページ（2022年10月8日参照）

<http://gajumarubook.jp/?pid=149462026>



2. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

2-2. 国際学会・機関の情報(舞踊学・演劇学・音楽学・パフォーマンス研究)

①国立民族学博物館 特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」

岩澤孝子(北海道教育大学)

1. 基本情報

学会名(原語)	Minpaku Special Research Projects (Theme Category: Humans) “Performing Arts and Conviviality”
日本語訳名	みんぱく特別研究(テーマ区分: 人間) 「パフォーミング・アーツと積極的共生」
学会設立年	2018年4月～2023年3月 現在進行中のみんぱく特別研究は「環境・人間・文化」の3区分に分かれ、さらにそれぞれ2つの研究会を有する全6つの研究会が企画・実施されています(コロナの影響で緊急枠として1つ研究会が追加されました)。
事務局(場所)	国立民族学博物館
HP	https://www.minpaku.ac.jp/post-project/6915
趣旨・大会情報等	本研究プロジェクトのテーマである「積極的共生active coexistence (conviviality)」とは、集団間の忌避感や偏見が残る「消極的な共生」に対する概念で、お互いの文化的特性・差異を認め、尊敬の念を抱けるような共生として定義づけられています。パフォーミング・アーツが、世界各地で民族主義的、排他主義的な考えの台頭がみられる現代社会における最重要課題の一つである「積極的な共生」の達成に寄与する枠組みや条件を具体的な事例の蓄積とそれらの比較検討から探り、その実現に向けた具体的な方策としてとらえる総合的な研究を目指しています。
ジャーナル	2022年度末に英語論集刊行(予定)
入会方法	2018年に日経ホール(東京)で実施された公開講演会に加え、2021年3月から2022年5月に、7回に分けてオンライン実施した一般参加可の本研究会はすでに終了済みです。

2. 当該学会に参加して

本研究会は2020年3月に国立民族学博物館で招集実施される予定でしたが、新型コロナ・パンデミックの影響を受け、複数回にわたる公開オンライン会議として実施されました。基調講演を含めて発表者は国内外から選ばれた12名の研究者で、その多くが民族音楽学/音楽学を専門としています。ただし、対象をより広く「パフォーミング・アーツ(身体を活動の基盤とする幅広い活動)」とし、そこから多様な集団の共生を考えるというアプローチは、ダンスの今日的課題と研究方法と密接に関わっていると言えます。

発表者のフィールド(国)は、日本、タイ、マレーシア、インド、アメリカ、カメルーン。これらは単に地域的な広がりを示すものではなく、たとえば、在日コリアンや在日フィリピン人、日系アメリカ人、アフリカ系アメリカ人など、移民やディアスポラが対象になっているケースや、

2. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

民族や宗教の異なる人々が混在する共同体の事例（マレーシア）やマルチリンガルの共同体の事例（カメルーン）など、現代的で多様なコミュニティの課題に着目した研究でもありました。

本研究会において私は、タイの首都バンコクにあるスラム・コミュニティにおける実践をケーススタディとして発表しました。バンコクという大都市のスラムには地方やタイ国外からさまざまな文化的・社会的バックグラウンドを持つ人々が集まり、劣悪な住環境で暮らしています。私はこのスラムに居住する青少年を対象に2010年代半ばにスタートしたコミュニティアートの活動について発表しました。スラムに育つ子どもたちは家庭の経済的窮状（貧困）故に社会的弱者とみなされるとともに、さまざまな土地からやってきた移住者の子であるがゆえに安全で安心な地域的なつながりも欠如しています。それゆえ、積極的に他者とのコミュニケーションをとることに自信を持てず、孤立しがちであり、将来的には薬物・アルコール依存症や犯罪など深刻な事態に巻き込まれやすい状況にあります。このような環境にある子どもたちに対して、主に外部のNGO団体などの組織が参入し、彼らのケアや支援が行われてきましたが、私が事例として取り上げたのもそうした社会活動団体の一つ（Music Sharing）です。Music Sharingでは、彼らにポピュラー音楽を学び、それをコミュニティ内外で発表する場を提供しています。この活動は遊びの要素に満ちており、普段は学校の授業についていけないような子どもたちが自由にイキイキとした生を楽しんでおり、パフォーマンスを通じて自尊心と他者とのコミュニケーション力を育んでいます。この活動は、スラムを生きる青少年の生き方に影響を及ぼすだけでなく、彼らによるパフォーマンスの場（ここではコンサートやワークショップ、フェスティバル）に参加した、コミュニティ内部の大人やコミュニティの外に位置づけられる他者にも影響を与え、他者理解と関係の再構築において、有効に作用していると考えられます。

このように、異なる文化的背景を持つ他者が出会うコンタクトゾーンは世界のあらゆる時空間に存在していますが、そこでは他者を排除しようとする関係の力学が作用しがちです。パフォーマンスのプロセスはそのような既存の関係の力学において弱い立場にある個人/集団をエンパワーすると共に、本研究プロジェクトのテーマである「積極的共生conviviality」を促すような新たな関係を構築する場/契機としてが機能しうる、という事柄にあらためて気づかされる研究会でした。

2. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

2-2. 国際学会・機関の情報(舞踊学・演劇学・音楽学・パフォーマンス研究)

②日本ポピュラー音楽学会

垣沼絢子(フリー)

1. 基本情報

学会名(原語)	日本ポピュラー音楽学会 【略名】JASPM
英語訳名	The Japanese Association for the Study of Popular Music
学会設立年	1990
事務局(場所)	東京藝術大学 千住キャンパス 大学院国際芸術創造研究科 毛利嘉孝研究室内
HP	https://www.jaspm.jp
趣旨・大会情報等	JASPMは、ポピュラー音楽に関心を持ち、研究に携わる人々の交流を促進し、その研究の発展に寄与することを目的とする学会です。 毎年12月に2日間規模の大会、関東・関西・中部の3地区で複数回の研究例会を開催し、会報「JASPMニューズレター」を年4回発行、学会誌『ポピュラー音楽研究』を年1回発刊しています。 国際ポピュラー音楽学会 The International Association for the Study of Popular Music (略称・IASPM)と連携しており、JASPMとIASPMの両方に参加している会員によって、JASPM国際委員会／IASPM日本支部が運営されています。
ジャーナル	『ポピュラー音楽研究』年1回刊行 ※現在11号(2007)までJ-STAGEにて公開済
入会方法	HP「入会方法」より入会申込書をダウンロードし、学会事務局まで郵送します。年会費は、個人会員(院生含む)6千円、学生会員(学部生)4千円、団体会員1万円、賛助会員(1口)1万円で、振込用紙で納入します。

2. 当該国際学会に参加して

JASPMは民俗芸能や大衆芸能、アイドルやクラブカルチャー、劇場文化など、大衆音楽研究も盛んであり、ダンスを含む身体表現の研究発表も多く見られます。社会学、文化人類学、文化史や表象文化論の観点など、多様な方法が用いられており、卒論・修論発表会も東西で開催されるなど、活気ある学会です。音楽実践者も多く、コロナ禍ではポピュラー音楽の現場と文化支援の課題を考える「新型コロナウイルスと音楽産業JASPM緊急調査プロジェクト2020」を発足し、研究者・現場の方々・政治家などを呼んでシンポジウムを複数回開催するなど、現場と行政と研究をつなぐ役割も果たしています。

私は2020年12月の第32回大会で「身体のパリフォニー・踊り手、演じ手、歌い手」と題したワークショップを主催し、音楽を歌う・演じる・踊る身体(VRアバター・俳優・アーティスティックスポーツの踊り手)を音楽分析とどう結び付けていけるのかを、分析美学・演劇学・文化人類学の研究者および参加者と共に議論しました。また、2022年7月には、細川周平『近代日本の音楽百年』合評会に評者として参加し、演劇や舞踊と結びついた近代日本の音楽研究について議論しました。

国内学会ですが、世界中の音楽・音楽研究との関係が深いです。上演／パフォーマンスにも焦点が当てられており、自由闊達な議論が出来る風通しの良い学会だと感じます。

3. 私にとっての在外研究

「研究者と一人の人間としての狭間での奮闘」 ボローニャ大学(イタリア)・UCLA(アメリカ)

金光真理子(横浜国立大学教育学部)

1. 基本情報

渡航先(都市・国名)	1. イタリア 2. アメリカ合衆国・ロサンゼルス
研究機関	1. ボローニャ大学 2. カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)
在外期間	1. 2000～2002年 2. 2012年
目的	1. イタリア各地のフィールドワーク&民族音楽学の調査 2. アメリカの民族音楽学の調査
研究プログラム	1. イタリア政府奨学金&ロータリー国際親善奨学生 2. 所属大学サバティカル助成
グラント申請方法	1. 書類申請・審査および面接 2. 学内申請・書類審査

2. 在外研究を終えて

私は大学で民族音楽学を学び、イタリアへ留学して、とくにサルデーニャ島の民俗音楽をフィールドワークしました。私がイタリアをフィールドとして選んだきっかけは、イタリアといえばオペラ、クラシック音楽の国というイメージが強いものの、実は民俗音楽の宝庫でもあり、とくにサルデーニャ島にはラウネッダスという一人で3本の葦笛を吹いてポリフォニーを奏でる、古代アウロスの末裔とも言える楽器があることから、イタリアの音楽を「ヨーロッパ」の枠組みではなく、「アフリカ」や「中東」も含めた「地中海」という大きな枠組みで捉えたら音楽の理解も深まるのではないかと明確に考えていたかは定かではありませんが、ぼんやりとイタリア音楽の源流に惹かれたことからです。民族音楽学は「人はなぜ音楽するのか？」をさまざまな角度からアプローチする学問と言えますが、イタリアへ行って、さまざまなバックグラウンドの人々、友人となった民族音楽学を学ぶ学生や調査に協力してくれた人々と交わる中で、私の音楽の見方は大きく変わりましたし、人間としても大いに成長させてもらったと思っています。

研究あるいはフィールドワークは、私の場合、まずは行ってみたというのが実態です。先行研究として半世紀前にデンマーク人の研究者がまとめた書籍があり、そこから大まかな全体像は掴んでいたものの、まだインターネットも無かった当時、聴くことができたのは大学のLP音源2枚だけで、何をリサーチ・クエスチョンとすべきかはっきりしない状態でした。夏休み、語学学校の先生など身近な人の繋がりを頼りにサルデーニャを訪れ、ラウネッダス奏者の情報を仕入れては、電話帳片手に電話をかけてみる。そもそも知らない番号からの電話で、拙いイタリア語で日本人がラウネッダスを研究したいと言ってもなかなか理解し

3. 私にとっての在外研究

てもらえず、ようやく見学できた教室で、初めて生のラウネッダスの音を聴いた時には目頭が熱くなったのを今でも覚えています。そうして少しずつ人間関係も広がり、ラウネッダス奏者の人間関係も分かるようになり、ラウネッダスの音楽も理解できるようになり、『舞踊学』第31号(2008)にも投稿したように、音楽と舞踊が切っても切れない関係にあることが分かり、舞踊も調査するようになりました。すべては手探りで、今思い返しても効率は悪く、行き当たりばったりの調査でしたが、サルデーニャに暮らす人々と同じように生活に浸りながら音楽について考えることができたと思います。

調査中は研究がどのようにまとまるのかは分かりません。私はボローニャとサルデーニャ、日本とサルデーニャを往復する期間があり、一人で思考し整理する時間と、現地にどっぷり浸かって経験する時間を行き来していましたが、次第に研究者というよりは一人の人間として後者を楽しんでしまっていました。今では反省もしますが、おかげで得られた多くのデータもあると思います。フィールドワークの指南書は書けそうにもありませんが、私の人間としての成長、ちょっとやそっとのハラスメントではめげないとか、イタリアでマンマと呼ばれる母たちのように強く優しい女性になりたいという思いはその経験のおかげです。



「サルデーニャ島の聖エフィジオ祭にて」
(衣装着せてもらい一緒に歩かせてもらいました)

帰国後、まだイタリア人感覚が抜けないまま無理矢理に博士論文を提出しました。調査を生き抜く力と、調査データを研究としてまとめる論理的思考力とのギャップが、当時はまったく分かっておらず、調査データを十二分に活かさないまま閃きを文章にしたような博論になってしまいました。もっとも、現在もその悩みは解決しておらず、調査の身体感覚をいかに研究として言語化できるか模索中です。

その後も、自分の研究をとくに英語で発表したいという思いがありました。私にとって言葉は永遠の課題です。大事なものは流暢にしゃべることよりも発言の中身なのですが、その発言そのものがやはり言語によって形作られる以上、語学は重要です。私は少しずつイタリア語で考えるようになっていたものの、英語はなかなか身に付きませんでした。国際伝統音楽学会The International Council for Traditional Music (ICTM)等の国際学会において英語で発表しながらも、自分の研究をある意味分かりやすくするために単純化して装っている感覚がありましたし、他の研究者たちとの対話にも苦手意識を持っていました。

英語で考えられるようになりたい、シンプルながらも切実な理由から向かったのがアメリカのUCLAです。勤務先の大学の海外研修制度に応募し、UCLAで客員研究員として受け入れていただきました。勤め始めて3年目、ようやく仕事を覚えた頃で、同僚の先生方には多大な迷惑をかけることになり大変恐縮でしたが、快く送り出していただきました。アメリカは民族音楽学Ethnomusicologyを生んだ国ですが、中でもUCLAは

3. 私にとっての在外研究

初めて大学の学部として民族音楽学を設置した歴史があり、世界のさまざまな地域の音楽を演奏を通して学ぶ授業、ワールド・ミュージック・アンサンブル World Music Ensembleが充実しています。この民族音楽学のメッカとも言えるUCLAを体験してみたいという思いもありました。英語のせいか、客員研究員という身分のせいか、年齢のせいか、UCLAではイタリアの時のように学生と仲間になることはできませんでしたが、大事な人との出会いと学びがありました。

私と同じく客員研究員としてトルコのイズミールから訪れていたイルハン・エルソイ先生。イルハンはアメリカ人よりも日本人の私に価値観が近く、授業中、学生がりんごをかじったりと自由に飲食しているのを見て、先生に失礼だと顔をしかめていました。イルハンは私よりも英語は下手でしたが、トルコの擦弦楽器サズの先生で、その演奏がアメリカ人の学生の興味をひき、そこから対話が生まれ、サズのレッスンをしたり、近場へ観光したり、私はその交流の恩恵に預かっていました。私は自分が日本人でありながら日本の音楽に通じていないことのデメリットをあらためて痛感しました。実はイタリア留学時も何か日本の歌を歌ってと言われて困った挙句に《君が代》を歌い解説したことがありました。自国の文化、自分の文化を持つ強みは、逆にそれを持たない弱みは、外国に出て初めて痛感することでしょう。

UCLAで私を引き受けてくれたティモシー・ライス教授は著名なブルガリア音楽研究者で、ブルガリアから音楽家を招いて合唱と器楽アンサンブルの授業を開講していました。ブルガリアの女声合唱は、地声発声と民謡をベースに西洋的な和声付けをした音楽とが特徴で、80年代以降ブルガリアン・ヴォイスとして世界的なブームになりました。合唱を指導するツヴェタンカ・ヴァリメゾヴァは有名な歌手で、その夫のイヴァン・ヴァリメゾフもブルガリアのバグパイプであるガイダの有名な奏者で、ブルガリアの合唱とアンサンブルはUCLAの名物でした。私は合唱に参加し、ブルガリアの音楽に魅了される一方、ツヴェタンカとイヴァンの人柄が素晴らしく、異国の地で明るくたくましく生きる2人の姿から多くを学びました。2人にとって音楽が、音楽の才能が、みずからのアイデンティティの拠りどころとなり、人とのつながりを生み、自身も周囲も笑顔にしていけることを目の当たりにし、音楽の力を実感しました。



イヴァンとツヴェタンカがブルガリアを案内してくれたとき
(2012年)に一緒に撮った写真

私の拙い在外研究の思い出はここまでにします。近年、コロナ禍で留学が難しくなっていますし、分野にもよりますが、みずからのホームを離れた場での学びは研究にとっても人生にとっても大きな意味を持つと私は信じます。

4. 国際学会・シンポジウム発表報告

North American Society for Sport History (NASSH) 2022

高野美和子 (日本女子体育大学)

1. 基本情報

学会名(原語)	North American Society for Sport History 【略名】NASSH
日本語訳名	北米スポーツ史学会
学会設立年	1972
事務局(場所)	固定の事務局(場所)を設けていないようです。
HP	https://www.nassh.org
趣旨・大会情報等	スポーツ史の研究を促進、奨励し、スポーツ史に関連する学術的な執筆や研究を支援、奨励し、同じ目的を持つ地域、国内、国際組織と協力することを目的としています。毎年学会が開催され、2023年はワシントンDCにて予定されています。
ジャーナル	研究論文集Journal of Sport History は年3回(春・夏・秋)発行されます。会員はインターネット上で既刊誌も含めて閲覧することができます。
入会方法	HPトップにある「JOIN NASSH」にアクセスし、会員の種類(個人、学生、期間)とプロフィールを記入して送信します。年会費は個人が105ドル、学生が40ドル(アメリカ以外の国)で、クレジットカードでの支払いができます。

2. 学会大会の現況

2022年5月27日(金)から30日(月)までの4日間、シカゴで開催されたNorth American Society for Sport History (NASSH)の学会大会に参加してきました。NASSHは1972年に発足した学会で、その目的はスポーツ史の研究、調査、執筆を促進し、同じ目的を持つ地域、国内、国際組織を支援し協力することとされています。会員は世界各地にあり、多様な歴史的背景の中で、スポーツと運動の研究に関するアイデアと情報を共有することに取り組んでいます。今回は50周年の記念大会ということで、ヒルトンホテルを会場に、例年よりも大きな規模での開催のようでした。開催方法は、新型コロナウイルスの影響からハイブリッド形式で行われ、4日間のプログラムは、基調講演、シンポジウム、複数のセッション、優秀論文賞受賞者による発表などが盛り込まれ、レセプションやバンケットでの交流の場も含め、とても充実していました。

私は今回、日本のスポーツ史研究者の方々とグループを組んだ形での参加で、「個人と集団のヒューマン・アイデンティティ、スポーツと“インクルージョンvs. エクスクルージョン”の問題」をテーマとしたセッションの中で、江口隆哉とポストモダンな舞踊について口頭発表を行いました。発表を通じて様々な国の研究者と意見交換をすることができ、新たな視点や知見を得ることができました。また、スポーツ史における人種、ジェンダー、国家、民族、文化などをテーマとした他のセッションの発表やBIPOC研究者によるシンポジウムを聴くことができ、とても

4. 国際学会・シンポジウム発表報告

学びの多い貴重な時間となりました。

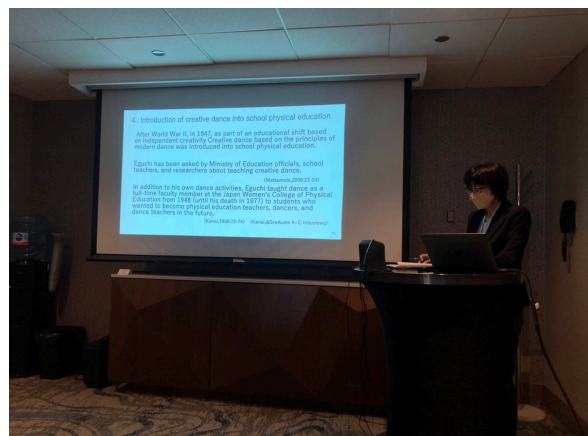
NASSHは毎年5月に北米で学会を開催し、年3回、春夏秋にJournal of Sport Historyを発行しています。これまで舞踊に関する研究発表は少なかったようですが、今後、興味がある方は、参加されると新しい視点や発見が得られるのではないかと思います。

今回、スポーツ史の学会ということもあり、ダンス・パフォーマンスやダンス・ワークショップ等はありませんでしたが、たまたま学会会場近くのWintrust Arenaで開催されていた全米プロ女子バスケットボールチームシカゴ・スカイの試合を観に行く機会に恵まれました。そこでは選手のプレイの迫力はもちろんですが、DJによるチームの攻防に合わせたビートの効いた音楽の演出が圧巻で、それはスポーツでありながら、ダンスパフォーマンスを観ているような、ノリノリのグルーヴ感を味わえる新しい体験でした。



全米プロ女子バスケットボールチーム、シカゴ・スカイの試合
(Wintrust Arena)

今回の学会参加に際し、渡航前と帰国前に新型コロナウイルス検査の陰性証明提出が課されていたため、その準備でかなり神経をすり減らす場面も多かったのですが、久しぶりに海外の研究者の方々と対面で交流し、またアメリカならではの文化に触れることもでき、とても有意義な学会発表の旅となりました。



NASSH 50周年記念大会(ヒルトンホテル, シカゴ) /
筆者による発表

5. 委員会より

5-1. 学会誌編集委員会…八木ありさ

学会誌『舞踊學』には、査読を経て受理された投稿論文（3月末日締め切り）の他にも、会員の皆様の著作情報が掲載されます（単著、共著、翻訳。ただし舞踊学関連書で、本人から報告のあったもの一人5点以内に限り）。ご著書が出版されました際には随時メールにて学会誌編集委員会 (buyogaku.editorial@gmail.com) までお知らせください。

5-2. 2022年度学会大会…朴京眞

「2022（令和4年）年度 第74回舞踊学会大会」は2022年11月19日（土）～20日（日）に聖心女子大学で開催いたします。詳細につきましては学会HP及びニューズレターの第74回舞踊学会大会のご案内をご覧ください。

5-3. 例会企画運営委員会…森立子

6月18日にオンライン（Zoom）開催いたしました第25回定例研究会は、おかげさまで盛会のうちに終了いたしました。ご参加くださった皆様にあたためてお礼申し上げます。

なお来年度も、第26回定例研究会をオンライン形式にて開催予定です。オンラインの利点を活かした研究会にすべく、委員会でも準備を進めてまいります。会員の皆様におかれましては、ぜひ積極的に研究成果の発表をご検討下さい。

5-4. 研究奨励賞選考委員会…貫成人

2022年度の研究奨励賞授賞候補の推薦締切は2022年3月31日であったが、同日までに推薦はなく、また、奨励賞委員四名からも候補は出なかったため、本年度の研究奨励賞は「該当者なし」となった。

5-5. HP管理委員会…寺山由美

事務局のメールアドレスが変更になります！

舞踊学会HPのサーバが切り替わります。2023年1月より、事務局のメールアドレスが変更になります。直前にHPやメーリングリスト（ML）にてお知らせ致します。

お願い

1. 学会からのメールを受信されていない方は、MLに登録されていない可能性があります。アドレスを下記（事務局アドレス）までご連絡いただけますよう、お願い申し上げます。

danceresearch.info@kagoya.net

また、随時HPをご覧ください。

5. 委員会より

2. シンポジウムやワークショップ、研究会、展示の開催や、研究助成金の募集などの学術的な情報を、以下のアドレスまでお寄せ下さい。会員の皆さまと共有致します。情報は以下のアドレスまでお送り下さい。

jouhou-dance-hp@kir.jp (舞踊学会HP管理委員会)

皆さまからの情報をお待ちしております。

※ML配信やHP掲載の手続きに時間を要するため、余裕をもってご連絡下さい。

5-6. 学術連合委員会

藝術学関連学会連合報告…貫成人

1. 2021年11月21日、ZOOMによって令和三年度第二回委員会が開催され、第16回公開シンポジウムを、「疫病と芸術」というテーマで2022年6月11日（土）13時～17時、ZOOMで開催し、オーガナイザーは、美学会、美術史学会、比較舞踊学会が担当することとなった。パネリストは、年内に応募要項を周知し、2022年3月までに決めることとなった。
2. 2022年6月11日午前、令和四年度第一回委員会がZOOMによって開催され、(1)事務局長の旅費、(2)2023年度第17回公開シンポジウム募集要項について審議された。
3. 同日午後第16回公開シンポジウム「疫病と芸術」をZOOMにより開催した。舞踊学会の石渕聡会員など五名のパネリストの充実した発表の後、200名程度の参加者による熱心な質疑がおこなわれた。
4. 2022年11月26日（土）、令和四年度第二回委員会をZOOMで開催する予定である。

日本スポーツ体育健康科学学術連合…寺山由美

2022年度総会が6月に書面表決により開催されました。出席団体数により総会は成立し、全審議事項が可決されました。

5-7. ニュースレター委員会…波照間永子

新たな委員とともに、「国内外の舞踊学関連機関の情報発信」をニュースレターの主な方針に定めました。年一回、学会大会の1ヶ月前の発行を目指します。3年間、よろしくお願い申し上げます。

6. 事務局だより

その1. 年会費納入のお願い

郵便払込だけでなく、銀行振込も受け付けております。

★郵便払込取扱票 口座記号番号：00960-5-154553 加入者名：舞踊学会

★銀行振込 ゆうちょ銀行 店番：068 口座番号：普通 1701147

★年会費：7000円

★本年度より、年会費納入のお願いをメールでもお送りしております（2022年6月20日送信）。メールが届いていない場合は事務局までご一報ください。

その2. 登録情報変更申請のお願い

年度が変わる時期などにお引越等で住所が変わり、当学会からの郵便物などが届けられない、所在不明の会員の方が毎年増えております。メールアドレス、住所、勤務先等に変更のある方は、学会HPの「各種事務手続き」から「会員情報の変更申請（会員限定）」のページにて変更後の情報をお寄せ下さい。もしくは、事務局までメールでご連絡下さい。

HP：<http://www.danceresearch.ac/jimu.htm>

事務局メール：danceresearch.info@kagoya.net

★なお、舞踊学会の事務局メールアドレスが、令和5年1月より新事務局メールアドレスへと切り替わり、令和5年4月1日より新アドレスへ完全移行となります。

新事務局メール office@danceresearch.jp

★現在Web会員名簿を削除しております。お問合せがございましたら、事務局までご連絡ください。

舞踊学会事務局 酒向治子

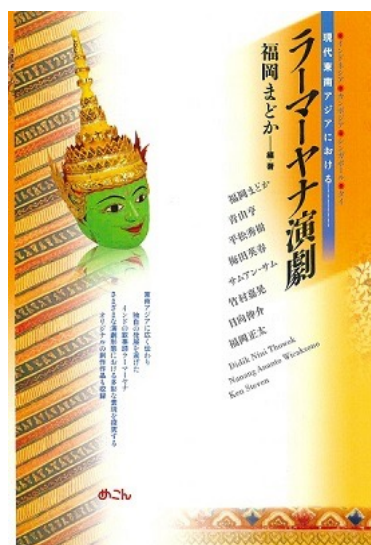
7. 情報コーナー

『現代東南アジアにおけるラーマーヤナ演劇』 (福岡まどか編・著、めこん、2022年)

岩澤孝子(北海道教育大学)

9世紀以降東南アジアの広範囲に広まり、国や地域による独自の発展を遂げてきた古代インドの叙事詩『ラーマーヤナ』。本書は、現代東南アジアにおけるラーマーヤナの演劇的上演に焦点を当て、その多元的な意味と表象を考察することを目的としています。ラーマーヤナの物語が、東南アジア諸国の文学や上演芸術、美術など多様な芸術表現の源泉として、また、その表現が人々の思考・思想にまで大きな影響を与え続けてきたことはよく知られていますが、それが伝統的な芸術表現にとどまらず、現代のコンテクストにも影響を与え、さらなる発展が見られるという視点から本書は描かれています。例えば、観光や文化遺産登録、ディアスポラ、ポピュラーカルチャー産業、文化交流事業や文化外交など多くの文化的な局面にラーマーヤナが生かされているという本書の発想は、伝統芸能を背景に発展を遂げてきたアジア諸国における現代的なパフォーミングアーツの問題を考える上で新たな研究アプローチへの気づきをもたらしてくれました。

さらに、巻末には、(本書のために)新しく委嘱した三人のインドネシア人アーティストによるラーマーヤナに基づくオリジナルの創作作品について、その作品解説と動画の情報(QRコードとURLから鑑賞可能)が示されており、パフォーミングアーツに関する研究図書の現代的なあり方を示唆するものと言えます。



A5判・並製・248ページ・カラー口絵8ページ

ISBN : 978-4-8396-0330-4

めこん ホームページより

<http://www.mekong-publishing.com/books/ISBN4-8396-0330-4.htm>

編集後記・奥付

ご寄稿くださいました先生方に心よりお礼申し上げます。

過去3年間は、海外の舞踊学関連情報をお伝えして参りました。今号から3年間は、足元の国内にも目を向け、より充実したニューズレターをお届けできるよう、新たな編集委員メンバーのサポートを得て取り組んで参ります。

本20号は、沖縄日本本土復帰50周年&「組踊」国指定重要無形文化財指定50周年の節目にあたり、国立劇場おきなわ 調査養成課の課長、茂木仁史さんへのインタビュー「伝承者養成と研究公演」を掲載しました。茂木さんのご協力に深く感謝申し上げます。（波照間）

記念すべき第20号の編集に携わることができ、大変光栄に思っています。本号のためにインタビューをお引き受けいただいた皆様、また、貴重な情報をお寄せいただいた皆様に感謝申し上げます。（岩澤）

毎回楽しく原稿を読みながら勉強させて頂いています。原稿をお寄せ頂いた先生方、編集でお力添え頂いた方々、ありがとうございました。（小林）

今年度より編集委員に加わらせていただくことになりました。波照間先生と他の編集委員の先生方の連携が素晴らしく、足手まといにならないよう頑張りたいと思います。（高野）

引き続き新生ニューズレター委員会に参加させていただき、感謝申し上げます。毎号諸先生方からのご報告に触れ、舞踊学の研究層の厚み、その土壌の豊かさを改めて実感しております。（外山）

お忙しい中、ご寄稿くださいました先生方に感謝申し上げます。コロナ禍で海外との物理的な往来が難しくなったことありますが、寄せられた原稿を読み、これを機会に国内の関連学会等に目を向けると、新たな発見をもたらしてくれるのではないかと感じました。（宮川）

本年度ニューズレター委員を担当することになりました。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。（武藤）

ニューズレター第20号

発行者：舞踊学会（会長：猪崎弥生）

発行日：2022年10月15日

編集（姓の五十音順）：

岩澤孝子 小林敦子 高野美和子 外山紀久子

波照間永子 松澤慶信 宮川麻理子 武藤大祐

ご意見、ご感想、掲示板への投稿希望は以下のアドレスまでお願いいたします。

ニューズレター委員会

danceresearch.newsletter@kagoya.net